

積丹半島に来遊するブリについて

佐藤 充

キーワード：ブリ、イナダ、フクラギ、積丹、回遊魚

はじめに

昨年（平成22年）は、北海道でのブリの水揚げ量が約2千トンとなり、3年ぶりの豊漁となりました（図1）。富山でも平年の10倍近い水揚げがあり、全国的に豊漁だったようです。ブリと聞くと本州以南で獲れる魚というイメージが強いですが、近年では積丹半島周辺での漁獲も増え、北海道でも注目されている魚種です。今回は、積丹半島に来遊するブリを中心に、漁業の歴史と、豊漁となった昨年のブリの漁獲状況などについて、紹介します。



写真1 積丹周辺海域で漁獲されたブリ

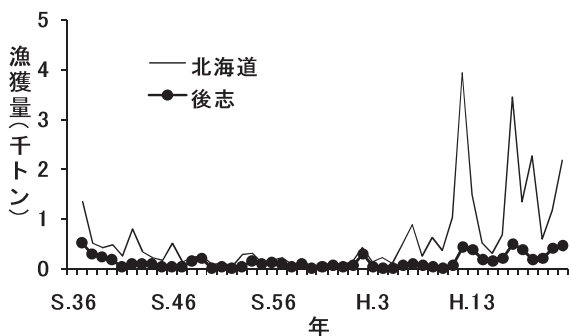


図1 北海道および後志におけるブリの経年漁獲量（北海道水産現勢より）

ブリ漁業の歴史豆知識

北海道でいつからブリが獲られていたのか、詳しい文献はありませんが、水産動物のアイヌ名にブリの名（エウス、プロウト、キイ）もあることから、古くから北海道で獲られていたと考えられます。積丹半島周辺では、明治20年代に寿都のマグロ大謀網で漁獲された記録があります。北海道の漁獲統計資料である北海道水産現勢では、ブリの集計が昭和37年からはじまりました。積丹半島周辺が含まれる後志管内の漁獲量を見ると、昭和37年は約5百トンでしたが、その後減少し、平成11年まで数十トンから約2百トンの間で推移していました。平成12年に、再び約5百トンを超え、それ以後は約2百トンから5百トンの間で変動しています。ブリの漁獲は定置網による漁獲がほとんどで、釣りによる漁獲がわずかにあります。刺し網や延縄などの試験操業もあったようですが、うまくいかなかったようです。

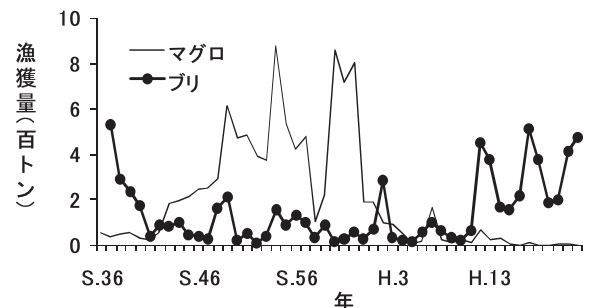


図2 後志におけるブリとマグロの経年漁獲量（北海道水産現勢より）

ブリはマグロと同じ回遊魚ですが、漁獲量の変動パターンは違ってきます。後志管内で漁獲されるマグロはクロマグロ（別名、本マグロ）がほとんどで、クロマグロがたくさん獲れていたのは昭和49年から昭和63年にかけてです。平成になると漁獲が減り、平成15年以降ではほとんど漁獲されなくなりました。ブリはクロマグロがとれていた年代には水揚げがほとんどなく、クロマグロがほとんどとれなくなった平成12年以降になって漁獲が増えました。ブリとクロマグロの仲は悪いのか、両方同時にたくさん獲れるというわけにはいかないようです。

積丹半島周辺でブリの漁獲量が増えているわけ (北海道でブリが獲れるしくみについて)

どうして北海道で、ブリが獲れるようになったのか、その鍵はブリの回遊と海洋環境の変化にあるようです。ブリの分布域は台湾近海から北海道までと広く、季節によって日本近海を大きく南北に移動する回遊魚です。最近、魚の移動を詳しく調べることができる「アーカイバルタグ」という装置を使った研究により、4歳から5歳にかけて、北海道沿岸から東シナ海まで往復していることが確かめられました¹⁾。東シナ海への回遊は産卵のためと考えられています。一方、未成魚（0～1



写真2 余市沖の定置網で漁獲されるブリ

歳魚)の移動範囲は小規模です。能登半島を境にして、能登半島以西の群れと能登半島以北の群れに分けられます。1970年代～1980年代では、能登半島以西で越冬していたと考えられていましたが、近年では異なり、能登半島以北の群れは能登半島から青森沖の範囲に留まっています²⁾。2歳魚になると積丹半島まで範囲を広げてくるようです。また、未成魚の越冬可能な海域の水温は10℃以上であることもわかりました³⁾。日本周辺の海は温暖な時期と寒冷な時期を交互にくりかえしています。海洋環境が温暖な時期には、未成魚が越冬可能な海域が北側に拡がり、寒冷な時期には南側に移ると考えられます⁴⁾。最近では温暖な時期にあり、ブリがより北の海域を回遊するようになったため、積丹半島周辺へも来遊するようになったと考えられます。

積丹半島周辺で漁獲されるブリについて

ブリは成長に伴って呼び名が変わるいわゆる出世魚ですが、地方毎に呼び方も変わります。北海道では体重が1kg未満の魚を「フクラギ」もしくは「フクラゲ」、1kgから5kg未満を「イナダ」、

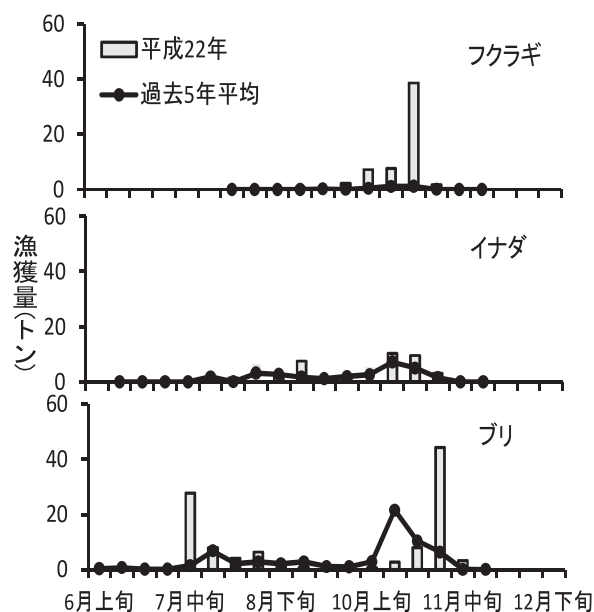


図3 余市港銘柄別・旬別漁獲量 (上:「フクラギ」、中:「イナダ」、下:ブリ)

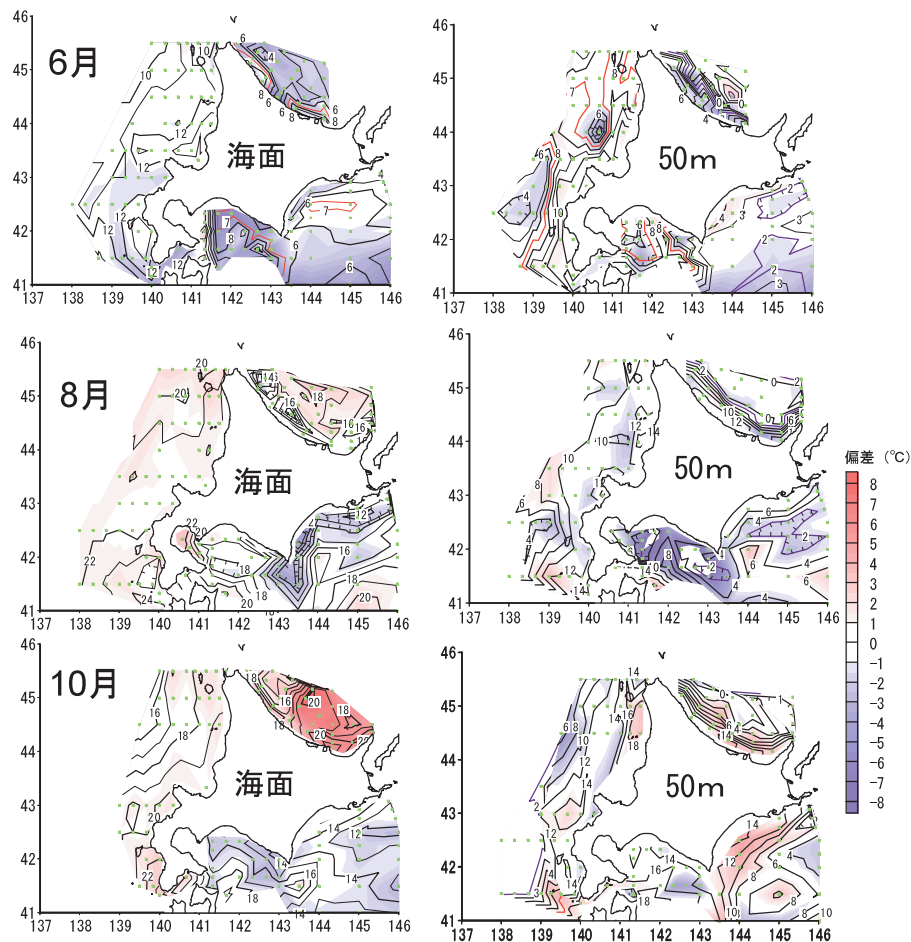


図4 平成22年の水温偏差図（中央水試資源管理部資源管理グループ作成）
偏差とは、平成元年～20年の平均水温と平成22年水温との差

5 kg 以上を「ブリ」という銘柄名で呼ぶ地域が多いようです。2～3kgの魚を「ハマチ」や「ワラサ」と呼ぶ地域もあります。おおよそ、「フクラギ」が0歳魚、「イナダ」が1～2歳魚、「ブリ」が3歳魚以上になります。

積丹半島周辺では、ブリは主に定置網によって漁獲されています。平成22年のブリ漁獲量を銘柄別・旬別に過去5か年の平均と比較すると(図3)、一番大きい「ブリ」が多く漁獲されたのは、7月中旬と11月上旬にピークが見られ、11月上旬は過去5年平均よりも遅い時期でした。「イナダ」は、「ブリ」ほどはっきりとしたピークは見られませんが、8月中旬と9月上旬、そして10月中～下旬に漁獲が多く、過去5年平均と同じような獲れ方でした。「フクラギ」は、過去5年平均と比較して

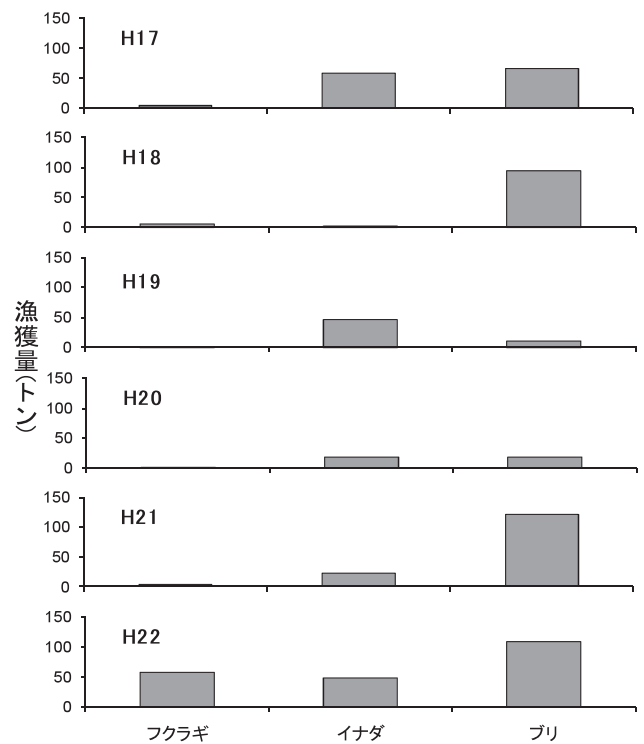


図5 余市港銘柄別・年別漁獲量

非常に多い漁獲が10月の下旬にありました。過去5年平均の銘柄別・旬別の漁獲量の推移をみると、まず大型のブリが、7月頃、北上の途中に、積丹半島周辺へ来遊し、その後「イナダ」や「フクラギ」といった小型のブリが来遊していることがわかります。その後、10月～11月に再び積丹半島周辺へ来遊するのはより北側の海域に回遊していた魚群が南下したものと考えられます。この時には、北上の時とは逆に大型の「ブリ」が最後にやってくるようです。

7月に積丹半島周辺へ来遊したブリはさらに北上し、一部はオホーツク海へも回遊します。平成22年には、オホーツク海をも越え、道東太平洋の釧路管内でも8～9月に5トンの漁獲がありました。道総研水産研究本部が発行している海況速報によれば、平成22年の9～10月は「道東沿岸流」が例年より沖合に張り出していたため、沿岸の水温が例年と比較して2～6℃も高くなっていました(図4)。ブリは暖かい水域をつたってオホーツク海から道東海域まで大回遊したと考えられます。

また、平成22年は積丹半島周辺での「フクラギ」の漁獲量が平成17年以降で最も多くなりました(図5)。前述の通り、小型なブリほど回遊範囲が狭いので、これまで積丹半島周辺へ来遊する「フクラギ」は余り多くありませんでした。平成22年の日本海の水温は10月には平年より高くなっていました。そのため、「フクラギ」が積丹半島までやってきたのかもしれませんが。「フクラギ」の漁獲量を見ると、近年にはない来遊量があったと考えられ、「フクラギ」資源が多いとすれば、今後にも期待が持てます。

参考文献

- 1) 井野慎吾, 新田朗, 河野展久, 辻俊宏, 奥野充一, 山本敏博, 2008. 記録型標識によって推定された対馬暖流域におけるブリ成魚の回遊. 水産海洋研究. 72 (2), 92-100.
- 2) 前田英章, 渡辺健, 井野慎吾, 奥野充一, 2010. 日本海における成長段階別の回遊様式の把握(1)年齢別の分布・回遊様式の把握(1)年齢別回遊群について. 水産総合研究センター研究報告, 30, 5-10.
- 3) 奥野充一, 渡辺健, 井野慎吾, 前田英章, 2010. 日本海における成長段階別の回遊様式の把握(1)年齢別の分布・回遊様式の把握(2)日本海回遊群ごとの遊泳水深と環境水温. 水産総合研究センター研究報告, 30, 11-16.
- 4) 渡辺健, 井野慎吾, 前田英章, 奥野充一, 2010. 日本海における成長段階別の回遊様式の把握(2)年齢・海域別回遊群ごとの個体数比率の把握. 水産総合研究センター研究報告, 30, 17-24.

(さとう とおる 中央水試資源管理部

報文番号 B2342)